ＤＴＭ - 第７回

どうもこんばんは。
今回は、前回に引き続き音楽理論の話をします。

とりあえず復習としてちょっとお付き合いくださいませ。

前回はスケールの話をしました。
半音からなるスケール：クロマティックスケール
全音からなるスケール：ホールトーンスケール
メジャースケール：全 - 全 - 半 - 全 - 全 - 全 - 半（ドレミファソラシド）

マイナースケールには３種類ありましたね。
ナチュラルマイナー、ハーモニックマイナー、メロディックマイナーでしたね。

メジャー、マイナーの総称をダイアトニックスケールといい、最初の音を基準にＩ～Ⅶまで数字が割り振られている、Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅶには役割があって、
それぞれトニック、サブドミナント、ドミナント、リーディングトーンという名前がありましたね。

ついでに協和音、不協和音の話もしました。

さて、今宵はこの中でも特にトニック、サブドミナント、ドミナントを酷使して、「コード」及び「コード進行」の話を展開していきます。

前回やった「Ｃ，Ｄ，Ｅ，Ｆ，Ｇ，Ａ，Ｂ」も時折出てくると思いますので
よろしくお願いしますね。

では、早速やっていきましょうか。

１章：コード

まず、「コード」とは何でしょう？

日本語訳では「**和音**」と訳されます。高さが異なる２つ以上の音が同時になることを言うのです。

前回、ハーモニックマイナーやメロディックマイナーを簡単にピアノロール上に表現するやり方をお教えしましたが、覚えていますか？

あの時、「Chord」にカーソルを合わせると沢山のコードとスケールの一覧が表示されたと思います。あの一覧からもうかがえるように、コードには沢山の種類があります。この講座でその全てを紹介するのは無謀なので、特によく使われる代表的なコードをいくつかご紹介します。

１：**トライアド**

最も基本とされるコードです。「トライ」ということから**３つの音で構成されるコード**になります。トライアドにもいくつか種類があります。以下は代表的なもの。

メジャーコード：１，３，５度の音で構成されます。

Ｃメジャーならば「ドミソ」で、表記は「Ｃ」

マイナーコード：メジャーコードの３度の音を半音下げたもの。

Ｃメジャーなら「ドレ＃ソ」で、表記は「Ｃｍ」

オーギュメント：メジャーの５度の音を半音上げたもの。

Ｃメジャーなら、「ドミソ＃」で、表記は「Ｃａｕｇ」

ディミニッシュ：メジャーの３と５度の音を半音下げたもの。

Ｃメジャーなら「ドレ＃ファ＃」で、表記は「Ｃｄｉｍ」

サスフォー：３度の音を半音上げたもの。

Ｃメジャーなら「ドファソ」で、表記は「Ｃｓｕｓ４」

また、コードを表記する際は、そのコードの一番下の音（「ルート」と言います）を表記します。以上の例ではＣをルート、つまり、「ド」が一番下の音なので「Ｃｍ」や「Ｃａｕｇ」と表記しました。ルートがＡ（ラが一番下）になる場合は「Ａｍ」とか「Ａｄｉｍ」とか表記します。

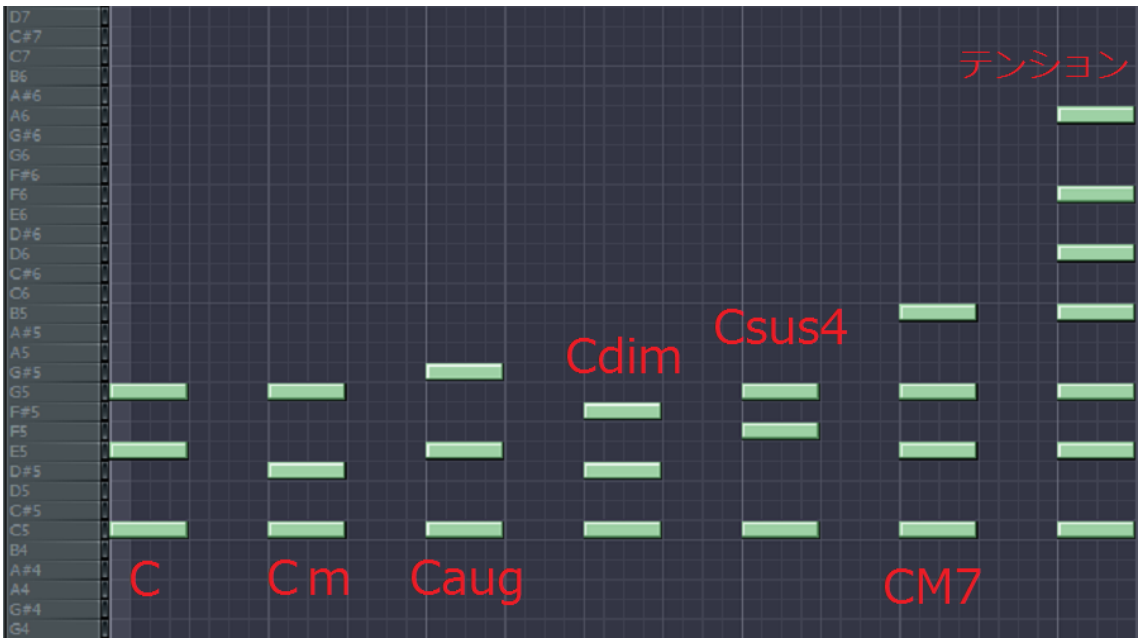
次は、トライアドにひと手間加えたコードです。

２：セブンス

ポピュラー音楽の基本となるコードで、トライアドに７度の音を追加します。

３：テンション

セブンスに９，１１，１３度の音を追加する。事実上、トライアドに７，９，１１，１３度の音を追加している。



ピアノロールでみるとこんな感じ。

実際に打ち込んでみてください。

では続きます。

４：**ダイアトニックコード**

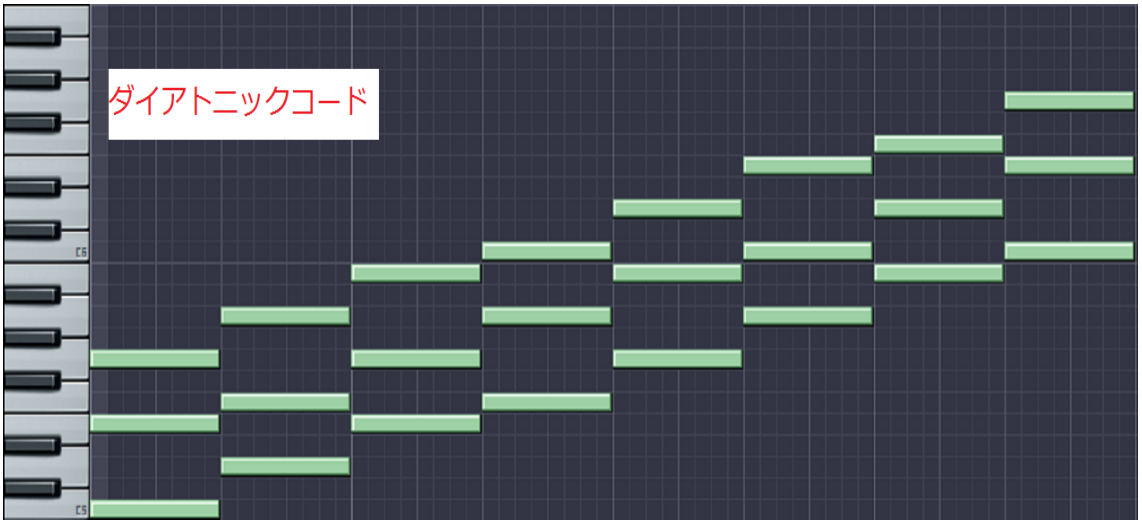
ダイアトニックってどこかで聞いたことありますね。

前回の講座で、ダイアトニックスケールなんて言うものありましたね。

ダイアトニックスケールの音にⅠ～Ⅶの数字を割り振っていろいろやります、とか何とか言ったかもしれません。この数字、ここで使います。

このコードは、ダイアトニックスケールのⅠ～Ⅶの音をルートとしてトライアドコードに乗せたものを言います。

Ｃメジャースケールでは、「Ⅰ＝Ｃ（ドミソ）」、「Ⅱ＝Ｄｍ（レファラ）」、「Ⅲ＝Ｅｍ（ミソシ）」、「Ⅳ＝Ｆ（ファラド）」、「Ⅴ＝Ｇ（ソシレ）」、「Ⅵ＝Ａｍ（ラドミ）」、「Ⅶ＝Ｂｄｉｍ（シレファ）」　となります。



これで、一通りのコードは紹介しました。しかし、これらを闇雲に並べただけでは、いい曲は出来ません。そこで…

２章：コード進行

先にも述べたとおり、覚えたコードを適当に配置しただけでは、いい曲というのは出来ません。

各コードには特別な役割があります。その役割をちゃんと理解してあげて、その役割を果たせるようにコードを並べてあげる必要があります。

さて、役割と聞いて、前回の講座で何かやりましたね。

ダイアトニックスケールにおいて、Ⅰ，Ⅳ，Ⅴが特別な役割を持っていました。

トニック、サブドミナント、ドミナントでしたね。
ダイアトニックコードでも、Ⅰ，Ⅳ，Ⅴは同じように
Ⅰ＝トニックコード（Ｔ）、Ⅳ＝サブドミナントコード（ＳＤ）、Ⅴ＝ドミナントコード（Ｖ）
と呼ばれます。それぞれ（確認も兼ねて）説明します。

まず、トニックコードです。その名の通り、そのスケールのトニック（主音）をルートとしているコードのことです。
前回の資料で、トニックが音の出だしとかシメに使える、とか書きました。
トニックコードも同じです。コード進行の最初、最後によく使われます。
特筆すべき特徴は、安定感と帰着間。だから最初と最後に使われやすいのです。
また、代理でⅥをトニックとすることもできます。（代理コード）

サブドミナントコードは、トニックから４度の音をルートとしているコードのことです。
前回やった通り、ドミナントへの移行を促し、単体ではちょっと浮いた感じです。代理でⅡをサブドミナントとすることもできます。

ドミナントコードは、トニックから５度の音をルートとしているコードのことです。
こちらも前回やった通り、トニックへの移行を促し、基本的には後にトニックを続かせます。代理でⅢ，Ⅳをドミナントとすることもできます。

こんな感じです。
役割さえわかってしまえば、後は配置を覚えてしまうだけです。

Ｔから始まり、その他いろいろな機能へ移行した後にＴで終わる、こんなコードの進行を「カデンツ」と言います。
例えば、Ｔ→ＳＤ→Ｄ→Ｔ　とか、Ｔ→ＳＤ→Ｔ　とか、Ｔ→Ｄ→Ｔとかです。

役割を理解したうえで、次に続かせるコードを置く、これがコード進行になります。
では、今宵最後の話です。

３章：メロディライン

よくぞここまで拙い講義に耐えて頑張っていただきました。
今まで教えたことを理解し、慣れてもらうことで自分のオリジナルの曲を作ることもできるようになりました。
ですが、最後にちょっと話をさせてください。
先のカデンツのところ。よく見ると、四字熟語で表現できそうなものがありますね。

「起承転結」です。

話の展開も「起承転結」があるときれいですよね。同じように、曲にも「起承転結」があるときれいになります。
その「起承転結」のどの部分にＴ，ＳＤ，Ｄをあてるか。表現力も問われます。

Ｔが「起」、「結」に使われるのは前回にも話しました。
あとは「承」、「転」をどういったコードで表現するのか、です。

もちろん、これが全て、というわけではありません。「起承結」に走ったっていいですし、役割を理解したうえで、ＴやＳＤ等をいろいろ工夫して使うのも各個人の自由です。ある程度の基準に沿っていると、きれいな曲になりますよ、ということなのです。

Ｔ、ＳＤ、Ｄに、ダイアトニックコードを例にとって説明しましたが、**全てのコードはＴ、ＳＤ、Ｄのいずれかに分類されます**。

したがって、どのコードも起承転結の一部分になりえます。それをどう扱うか、は作曲者の手に委ねられています。

次回、最終回になりますが、一つ教えてないものがありますのでそれをやった後に…

曲作りの一通りの流れを紹介します。
簡単にいま書いておくと…

構想を練る
↓
どういったメロディなのかテーマを決める
↓
メロディにコードをつける
↓
ドラムとかいろいろつける
↓
エフェクトをかける

こんな流れです。

では、次回最終回です。あと１回だけお付き合いください。
それでは、また…